

2023-2024 ドイツ旅行記

2023年の暮れから2024年の年始にかけて、娘の留学先であるドイツをプライベートで訪れたので旅行記として残しておく。

12月22日

夜11時頃に羽田を出発。ロシアの情勢により、通常のルートではなく、極地方を通るルート。したがって、極を通り過ぎる頃、幸運なことに車窓から生まれて初めてオーロラを見ることができた。23日の朝6時前にドイツ南部・ミュンヘン空港に到着。

12月23日、24日

ドイツ北部ブレーメン行きの飛行機がキャンセルになっており(おそらく、低気圧が近づいていたため)、直近の便のキャンセル待ちで何とか搭乗。電光掲示板に示されたおびただしい数の出発便の中でただひとつ「Cancelled」の文字、早速の洗礼を受けた。午前中にブレーメンに到着し、路面電車(トラム)で市内に移動。ブレーメン中央駅で待ちに待ったソーセージパンを美食。



ブレーメンは商業都市でもあり、グリム童話で有名なメルヘン街道の最終地点。中洲の市内中心にあるマルクト(マルクトはドイツ語で広場という意味)広場を散策。ここには世界遺産の市庁舎とローラント像があり、クリスマスマーケット最終日ということもあり、皆笑顔で楽しそう。つられて、暖かいブリューワインを飲む。カップはその土地特有のマーケットカップであり、持ち帰ることもできるが、返すと2ユーロ戻ってくる。イチゴをチョコレートでコーティングしたスイーツは絶品であった。ヨーロッパに来ていつも感じるが、果物が安くて美味しい。小ぶりで酸味があり、フルーツ特有の美味しさがある。日本の果物は太玉かつ甘くする傾向があり、値段も高く、手が出しにくくなっている。果物の本来の美味しさが損なわれている気がするのは私だけだろうか？

広場には聖ペトリ大聖堂があり、大空に聳え立つ2本の塔が壮大で美しい。留学中の娘とはこの教会で合流した。正午の鐘の音に心打たれた。教会の中はカトリック調で、パイプオルガンの音と静寂さがいつまでもその身を留まらせた。明日のミサの準備がされていた。

市庁舎横にはブレーメンの音楽隊で有名な4匹の動物の像が観光客を集めていた。ドイツに行く前に、グリム童話を子供以来読み直したのだが、4匹の動物達は実際にはブレーメンに行っていない。年老いた動物達は、ブレーメンで音楽隊を作るために旅立つの



だが、途中の山小屋で余生を過ごすことになる。

ベットヒャー通りにはさまざまなお店があり、お土産を求める観光客を楽しませてくれる。ブレーメン中央駅近くのアパートメントに宿泊。

12月25日

ブレーメンから鉄道で娘の留学先であるオスナブリュックに移動。車窓は牧歌的であり、湿地帯が続く。

ドイツでは、24日-26日までのクリスマス期間は祝日なので、オスナブリュックの施設や店は何処も空いていない。宿泊先のアパートメントで自炊し、のんびりと過ごす。

ところで、緯度が50度以上あるにも関わらず、雪が降らず意外と寒くない(氷点下ではない)。しかし、この時期は昼間の時間が少ないだけでなく、日照も極端に少ない。霧雨が伴う曇天が多く、ビタミンDが売られているのにも納得する。温暖な海流と陸との距離によりそれ程雲が鉛直に発達出来ないことで、乱層雲系の弱い雨が主流なのだろうか。西風による雲の流れも速かった。

12月26日

今日のオスナブリュックの日の出は8:37、日の入は16:19。太陽は南回帰線上にあり、光は中々届かない。鳥取の冬は日照時間が少なく、気が滅入るのだが、オスナブリュックはその比ではない。娘のアパートメントのオーナーが3月までタイに滞在するため出国したが、理解できる気がする。

今日は日帰り往復6時間でケルンに小旅行。朝早く、オスナブリュック駅までバスを使ったのだが、乗客がいなかったことから、運転手がアラブの音楽を大音量でかけていた。運転手はおそらく移民の人なのであろう。ドイツでは、移民との共生が問題になっていると聞く。

電車の車中、ドイツに来て初めて太陽を目にする。昼近くになっても太陽は高度の低い場所であり、高緯度を実感する(計算したら、ブレーメンでは14度、鳥取では31度。鳥取に帰った時の太陽は眩しかった)。

鉄道を使って、ミュンスターからドルトムントを経てライン川が流れるケルン駅に到着。駅の真正面にいきなり大聖堂が現れて、一同驚愕する。これほどまでの高さで装飾の教会はこれまで見たことがなく、いつまでも口をポカンと開けて上を見上げていた。是非とも中に入りたかったのだが、クリスマス中のテロに対する警戒で叶わなかった。とにかく、すごい数の警官が警備していた。しかし、クリスマスマーケットがまだ開催中で、ホットワインやケルンシュビール、ソーセージパンを飲んだり食べたりすることができた。本当、皆な楽しそうにしている、見ているだけでも幸せになる。



ライン川を眺めながらそぞろ歩きや買い物をしつつ、チョコレート博物館を見学。熱帯のカカオが自生する熱帯の植生相をハウスの中で見学できたり、カカオ豆の収穫や輸出に至るまでの工程、フェアトレードや環境保護の重要性など、かなり踏み込んだ紹介がなされている。観光客が熱心に見学していたのが印象的だった。

12月27日

オスナブリュックの街を娘に案内してもらおう。街に流れる川には多くの水鳥がおり、なぜか警戒もせず我々に近づいてきた。街の人が動物を大事にしているのが分かる。教会や市庁舎などの古い建物が多く、石畳の道と相まって非常に風情のある街だ。ショッピング通りも中々の数の店が軒を連ねており、大学生が暮らす街としては十分魅力的である。娘の通うオスナブリュック国立大学は冬季休暇中で、学生もいなかったが、風情のある校舎や広い中庭が印象的であった。娘の暮らす街や大学を見るのが今回の旅の目的だったので、達成できて良かった。今日は朝から同行者が高熱を出した。ドイツでは、よほどの重病ではない限り、病院にも行かず、風邪薬も飲まないそうだ。その代わりに、風邪に効くハチミツ入りのハーブティーを飲んで



ゆっくりと休むのが定番である。娘とDMに行って、様々な種類のハーブティーから熱に効くものをチョイスし、同行者に飲ませる。味や匂いはさしずめ薬湯のようであり、決して美味しいものではない。夜はスーパーでヴァイツェンビールやソーセージ、サラミ、ピザなどを買って自炊。ソーセージ、サラミとビールは本当に美味しい。

12月28日

オスナブリュックを9時頃に経ち、ミュンヘンに鉄道で移動。ミュンヘン駅からバスでミュンスターオスナブリュック空港に移動し、空路でミュンヘンへ。今日は北から南への大移動で終わった。

ところで、ドイツの電車やバスは平気で遅れたり突如キャンセルになったりする。日本とは違い、行き先やあと何分で到着するかという電光表示板があって非常に便利なのだが、今回もあと3分でバスが来るという時に突然キャンセルを知らせる表示になった。ドイツではギリギリのスケジュールは厳禁である。余裕を持った行動をしよう。

12月29日

今日は7:30頃のツアーバスでノイシュヴァンシュタイン城を観光。ここでは城主のルートヴィヒ2世に関しては詳しく解説しないが、1845年生まれで、18歳で即位、40歳でこの世を去った決して幸せではない人生を送っている。ノイシュヴァンシュタイン城は彼の嗜好により、中世を具現化したものだが、建築途中で王の座を追われたため、2年間しか住むことが出来ず、未完成に終わった。外観もさることながら、内装も金を貴重とした贅沢なものであり、彼の引きこもりがちな性格からは想像できない芸術的なものである。なお、彼の父の城も近くに建てられている。

彼が建てた3つの城のうち、唯一完成したリンダーホーフ城は、彼がルイ14世への憧れから構築したもので、内装はノイシュヴァンシュタイン城よりも遥かに豪華である。マイセンの陶器によるシャンデリアや鏡の装飾が美しい。2つの城ともに、彼の人生を前もって知っておくことで、城を見る目が変わってくる。



広大な牧場にぽつりと存在するヴィース教会は、木製のキリスト像の目から涙が流れたという奇跡により、大勢の巡礼者が訪れるようになったことで建築された非常に美しいカトリック教会である。内部の豪華な装飾、天井のフレスコ画は誰をも魅了する。



12月30日

今日はイングリッシュツアーにてローテンブルクに小旅行。アウトバーンおよびロマンチック街道を通る。途中、中世1000年代のハルブルク城を見学。昨日の城よりも遥かに戦いに主眼を置いた要塞のような城である。

ローテンブルクは、中世の面影が色濃く残る街である。マルクト広場を中心に、市庁舎や聖ヤコブ教会、マルクス塔などを見渡せる。ドイツレストランで食事を摂り、テディベアやクリスマス用品の店などゆっくりと散策する。中世犯罪博物館は、拷問や処刑に関する展示、犯罪に関する



る法律の歴史を解説している、非常に人間のおぞましさを感じさせるミュージアムであった。犯罪者だけでなく、魔女や悪魔に対する裁きが実際にあったという事実は、人間の権威、権力、差別等の複雑な絡み合いを感じさせずにはられない。日本人がよく来るのだろうか、日本語のきちんとした説明表記があるので、理解しやすい。娘は法学を学んでいるので、良い機会になったようである。

12月31日

外国で過ごす大晦日は初めてかもしれないが、紅白のないゆったりとした大晦日もいいものだ。

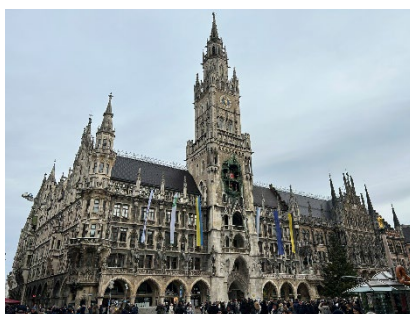
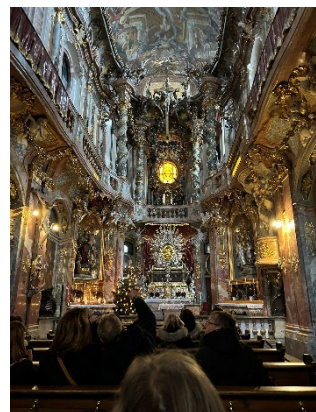
今日はミュンヘンの街で過ごした。アザム教会やマリエン広場にはたくさんの観光客が集まっており、正午の新市庁舎の仕掛け時計のイベントが終わると盛大な拍手が沸き起こった。この瞬間は世界が一つであることを実感した。日付けが変わると、花火を上げて盛大に新年を盛り上げるそうだが、夜の12時になった途端、とんでもない数の花火があちこちで上がるのを見た。レジデンツやニンフェンブルク城は休日のため行けなかったが、今度来た時の楽しみにしておこう。

明日の午前中は帰国予定であるので、ミュンヘン空港近くのホテルに移動。受付は犬を連れた宿泊客が列をなしていた。路面電車やバスに犬を連れて乗っているのはよく見たが、ホテルで一緒に宿泊できるとは驚いた。それにしても、犬達は良く躡けられている。ドイツにはペットショップがなく、犬を飼うには保護施設で厳しい審査をパスすることでやっと引き取ることができるそう。

ドイツでは、いろんな面でカルチャーショックを受けた。多国籍であること(移民も含めて)、動物や観光客に優しいこと、労働環境のこと、移動手段が洗練されていること、大抵の人が英語を話せることなど、日本と大きく異なることがたくさんあった。我々日本人に対しても干渉することなく、久しぶりにストレスフリーに過ごすことができた。日本人が見習うべきことはたくさんある。

1月1日

同行者の風邪が移った。中々に体調が悪いまま、ミュンヘン空港で娘と別れた。いつになっても別れは辛い。我々は日本に、娘はオスナブリュックに帰る。10日程の娘との楽しいドイツ旅はあっという間に終わった。



最後に、娘には、ドイツを案内してくれたことに感謝すると共に、成人を迎えたことにお祝いを申し上げる。

追記: ドイツを去る少し前に能登で大きな地震があったことや、我々が羽田に着いた2日の午後には、同じ羽田で航空機事故があったことが知らされた。